

ひとは与えられた運命に埋没して流され、翻弄される。これが「宿命」である。

それに対して、運命を自分の手で変えようとする生き方が「立命」である。

「宿命」に生きるか、「立命」に生きるか、によって人生の醍醐味が違って来る。— 安岡正篤「知命と立命」

3 話 連 載

第2話

かいこう かいげん 「邂逅と開眼」

医の道を志す

幼少期、内尾祐司は病弱だったが、内科医院に通院してなんとか学校に通えるようになった。医院では優しい老医者が笑顔で「ボクどうしたの?」って迎えてくれる。身体は辛かったが通院は楽しかった。

中学では軟式庭球部に所属し、身体を鍛え、県立横田高校では生徒会議長を務めた。幼少時の体験から医師を志すが、進学校でもない片田舎の高校で何ができるかと、周囲は冷ややかであった。しかし、数学の先生から毎日添削を受け、国語の担任からは「運命に向かって真摯に生きる」と励まされ、1980年奇跡的にも島根医科大学医学部医学科に合格した。

大学では奨学金を受けながら、家庭教師と血洗いのアルバイトをした。弓道部の主将も努め、なんとか6年間で卒業できた。卒業後は、廣谷速人先生主宰の整形外科講座に入局し、大学院博士課程で研究と臨床をしながら、京都では麻酔の研修も受けた。大学院生研修医時代は薄給で、「月月火水木金金」の日々だったが、充実していた。支えてくれる多くの人に巡り逢え、「これが“邂逅(かいこう)”なのかもしれない」と感謝した。

こうして、祐司は整形外科医の道を順調に歩み始めた。…かに見えた。

大阪へ夜逃げ?

1990年、島根医科大学の助手になった数ヶ月後の年末、急に大阪の病院へ派遣が決まった。

当時、教授から行けと言われれば、「イエス」か「はい」しかない。病院の残務処理を終えた大晦日の夜、ふらふらになって引っ越し作業をする彼の姿が、金策尽き果てた『夜逃げ』に見えたのだろう、引っ越し業者は「お金は払って貰えるんでしょね」と何度も念押しした。

世は平成、バブル全盛期。大阪は「花と緑の博覧会」の開催で華やかだった。しかし、祐司が勤務する病院の周辺には、ホームレス一掃のあおりを受けた路上生活者がひしめいていた。そして、この病院では、整形外科医は祐司を含めて2人しかおらず、毎日ぼろぼろになるまで働いた。

「にいちゃん、痛うてかなんわ!はよ、注射打ってえや!」

「はいはい、動かないでくださいね、背中赤い龍の目のところに打ってええですか?」

来院するのは、指を詰めた男性患者、十年以上通院する労災患者、支払いをせず帰る風俗嬢など。ここはまさに裏社会の縮図だった。ホームレスの暴動や、駅の焼き討ちもあり、治安が非常に悪く、毎日が恐怖の連続。常に身の危険を感じ、ホームに突き落とされないよう、電車がくるまでは壁際で待つ・・・緊張しない日はなかった。

—とんでもないところに来ちゃったなあ。

大きな不安と恐怖の渦に巻きこまれ、自己を見失いそうになっていた。

そして、逡巡の末—

「この運命に放りこまれた私は、こちらで果たさなければならぬ何かの役割があるかもしれない。運命に向かって生きるほかない。」

祐司は、この病院で自己研鑽に励むと決めた。整形外科医長を務め、週5日、2人の医師で1日100人の外来患者を診て、年間200例以上の手術をした。大学院の研究も、大阪から土曜の夜中から日曜日の夕方まで出雲に列車で帰り、実験を繰り返した。のべ3年半勤務する間に、専門医の資格も取得し、1994年、帰学を許された。

なお、勤務していたその病院は、その後、市が回収不能の100億以上の負債を抱えて経営破たんした。

人と同じことをやるな

1995年、島根医科大学整形外科講座は、越智光夫先生(現広島大学長)を第2代教授に迎え、講座では様々な新しい研究に取り組むようになった。越智教授のモットーは「人と同じことをやるな」。越智教授が考案された自家培養軟骨様組織移植(軟骨再生)は、当時誰も思いつかないような研究であった。祐司は世界で誰もしたことのない研究に没頭できることがなにより楽しく、寝食を忘れて軟骨細胞を培養した。後にこの軟骨再生技術は、現在広く実用化されている治療法となる。



整形外科学 内尾祐司 教授

越智教授との邂逅(運命の出逢い)による開眼が祐司の人生の次の扉を開かせる。彼は、膝スポーツ整形外科の臨床と、軟骨再生医学への研究へ邁進する。しかし、まさに整形外科医としてこれから順風満帆の未来が待っているかにみえた祐司に、神は次なる試練を与えることになる。